

推薦の言葉

呼吸管理がちょっと苦手なあなたに最高のプレゼントがあります。本書「人工呼吸管理に強くなる」です。“肺”，と聞くと、ストローの先に風船がついた模式図を思わず想像してしまう“あなた”にも良き伴侶となるでしょう。

実際、肺胞は無数の小部屋のような構造であり、その小部屋をつなげる廊下の役割を気道が果たしているのですが、機能に直結したこの微細構造とX線写真や血液ガス所見といった情報がうまく結びつかないために、「呼吸管理がちょっと苦手」と感じているのではないのでしょうか。

呼吸管理を必要とする病態はさまざまですが、“病氣”である意味を理解することがまず第一歩です。例えば、診療をともにする仲間とコミュニケーションを取ることが必要ですが、そのためにはよく耳にする用語を知らなければなりません。

呼吸生理学や解剖学の教科書を読んでも、呼吸苦を訴える患者の病態とはうまく結びつきません。本書では、皆さんが苦手な生理学や用語をまず扱っていますが、必ずしも1ページ目から読む必要はないでしょう。最終章の“特別編”から読みはじめても一向に構いません。“なぜ”がわからなければ生理学の章に戻れば良いですし、用語がわからなければ第1章-2を参照すれば良いのです。

勉強のしかたに決まりはありませんが、本書は基礎的な知識から高度な応用編まで網羅していますので、興味をもった内容、あるいは差し迫った問題から読み始めることをお勧めします。そこで、“とりあえず”の答えが得られたのであれば、落ち着いたときに改めて基礎的な話や高度な知識にチャレンジすればよいのです。

本書は、人工呼吸管理のビギナーや苦手な方を対象に入門書として企画されましたが、内容は最新の情報を網羅していますので、読み進むにつれ最先端の情報に思わず精通してしまいます。

21世紀に入ってから、人工呼吸療法についての新たな知見が山積しています。その無限の情報から、真に意義のある情報を選び出し、なぜ重要な情報であるかを理解することは個人では大変に難しいことです。より高度な内容に興味をもたれた読者にとって、キーとなる文献情報もキチンと紹介されていますので、大いに参考になることと思います。

机の上に本書のゲラ原稿が積まれています。量は決して膨大ではありません。しかし、本書を企画した讚井将満先生と大庭祐二先生のアイデアが、随所に込められています。では、まずは1ページ目を開けてみましょう。

2011年1月

東邦大学医療センター大森病院麻酔科 教授
落合亮一